

保育所と家庭の連携を探る

— 保育行事を通して親の保育参観を考える —

高 原 砂 夜 子 （大村市立三城保育所）

はじめに

保育所保育指針の、改定以前より保育のあり方に疑問を持ち、保育所がとても閉鎖的で、世の中から切り離れたところのように思えた。「集団生活だから、こうあらねばならない」「集団生活だからいろいろな規制はしょうがない」「集団生活だからきちんとした躰けをしなければならない」などと、子どもを取り巻く保育者集団や保護者のなかにも、「集団諦め症候群」が、根強くあった。

新保育指針により、「子どもたちを真ん中においた保育」「子どもたちの自主性を大切にする保育」が、声高く唱えられた。今までの保育に疑問を持ちながらも、何ら解決しなかったことを反省しながら、保育所生活のあり方を再検討した。

保育所が子どもにとって「昼間のもう一つの家庭」「自然な生活が出来るところ」になることを考えた。

保護者に対しても、共に子育てする仲間として、保育所のなかにどんどん入ってもらい、「自然に子どもと大人が集うところ」にしたいと考え「親の保育参加」を課題に新しい試みをはじめた。保育所行事の実践を通してこれからの保育所と家庭との連携を考えてみた。

本園の概況

人口七万人余の市のほぼ中心部にあり、商店街から少し離れた、公共施設の多数ある一角にある。保護者の八割が、勤労世帯である。

零歳児から五歳児まで120人定員の公立の施設である。

本園保育の変化と流れ

保護者は「預ける人」。保育者は「預かる人」の関係が色濃く、両方の関係が子どもを中心にして、淡々と流れる雰囲気があった。保育者は保護者に深く関わらず、保護者も子どもを一日預かって貰えばいいという意識が見受けられた。

□保育形態の変化

五年前手探りの状態から、3、4、5歳児の縦割り保育をスタートした。

零歳から2歳のクラスでは、年齢別保育をする。

今までの、一斉保育から、自由に自分で遊ぶ環境を選択し、好きな遊びにじっくり取り組める主体的な遊びを保障することを目的とした。

□園だより、クラスだよりの充実

この保育形態をスタートするにあたり、保護者への理解や協力を得るために、クラスだよりを通し、保育内容、保育方法、子どもの保育所での様子などを細かく知らせた。

親の保育参観の実践

親のこれまでの保育参加は、子どもの様子を参観することが多く、運動会・生活発表会・保育参観・クリスマス会等があった。これらは全て見せるための行事であって、親子で楽しく過ごすという内容ではなかった。又、保育者もついつい見せることに力を入れて、一人一人の子どもが楽しく活動することを見落として単に一つずつの行事を滞りなく消化しようという感があつた。以下、親の参加方法の変化を記してみる。

□保育参観～歩く保育参観

子どもが、散歩でいつも歩いているコースを、保護者も一緒に歩く。オリエンテーリングの方法で楽しく歩き、目的地に着いたら親子でゲームなどをして楽しく過ごす。子どもに負担が少なく、普段の子どもの姿を見たり、さらに他の保護者間の交流も実現できた。

□運動会

家族ぐるみの参加を呼びかけ、親子での競技を多く取り入れ、当日は保護者にも役割分担をお願いし協力してもらった。保育所の運動会を家族みんなの「ファミリー運動会」に変えていった。途中での休憩には、ビンゴゲームなどを取り入れ好評だった。

〔保護者からの感想〕

☆M子の園での生活の一面が見れて、とても楽しかったです。ちょっと残念だったのは、駆けっこのときその場に立ちすくんで走らなかったことです。M子のことだから、きっとニコニコしながら

ら走ってくれるだろうと期待していたのですが…
…。来年手を振りながら走ってくれることを期待
しています。お父さんが出場したリレーも、見な
さんのんびりした様子だったので。ネクタイして
出場したのですが……。本番では全力疾走!!応援
するほうも必死でした。でもでもとても楽しい運
動会でした。

☆楽しく参加できる運動会で、子どもたちの
びのびと普段の姿が見られて良かったです。近所
の子どもたちも、お父さんもおばあちゃんも楽し
んでくれました。運動会と聞いたら、つつい子
どもに頑張りを要求しますが、楽しく過ごすこと
が大事なんですね。

以上アンケートの感想にも少し変化が見られる。

☐子育て講座

毎週配付するクラスだよりに、子育てについてのい
ろいろな資料を「育児講座」として載せたり、専門の
講師を迎えて講演会を実施し、保護者と保育者が一緒
に学ぶ機会を作り、クラスだよりに、毎日の連絡帳
からお母さん方のお便りを載せて、クラスだよりをよ
り身近なものにした。

☐クリスマス発表会

子どもにとって負担が大きかった、劇・遊戯・合奏
等の出し物を思い切って無くし、クリスマス会は、「
サンタの国によこそ」と子どもたちを楽しい集いに
招待することにした。親子で近くの中央公民館に集ま
る。音楽劇や合奏は、就学児と保育者が一緒になって
発表した。もちろんサンタにはお父さんに活躍して頂
いた。

☐お母さんの集い

従来の保育懇談会から、「お母さんの集い」に名称
を変え、内容も子育てから嫁姑の上手な付き合い方等
まで幅広くなった。ベテランのお母さんが経験談を話
したり、新米のお母さんの悩みを聞いたり、和やか
な雰囲気のなかで、内容の濃い子育ての情報交換が出
来た。

実践後の変化

「あずける人」「あずかる人」の関係が希薄になり
お互いに気軽な言葉の掛け合いも見られ、保育方法や
行事参加への理解も少しずつ示された。

スタート時は、保育者間にも考えの違いが多く、保
護者を振り回すだけの行事となり、反省することがあ
った。公立園なので、毎年の保育者の異動で、せっか
く出来上がった体制が崩れ、再度検討することもある
た。

しかし、一つ一つの反省・失敗・挫折は、保育集団
の成長につながり、より高度な資質の高めあいが出来
た。

また、保護者の中にも、他園との比較で「見るため
の行事」を要求されることもあったが、「子どもにと
って何が大切か」を知らせ理解を得た。

行事の変化により、子どもと保育者にとって行事の
負担が少なくなり、日々の生活を大切にすることが出
来た。

おわりに

保育行事は、保育所生活では避けて通れない大きな
課題である。

今まで、保育行事を実施することで、子どもと保育
者に大きな負担がかかり、日々の保育所生活に大きな
影響を与えていなかっただろうか？

知り合いの小児科の医師から「どうして運動会や発
表会が近づくと、自家中毒にかかる子どもが増えるの
ですか？」という質問を受ける。この事からも、子ど
もの小さな心に大きな負担がかかっていることが分か
るのである。

保育行事に振り回されるのではなく、子どもを真ん
中に、保護者と保育者が手を携えてすっぱり包み込む
「楽しい集い」に変革していく必要がある。

共に考え、悩み、よろこび、行動することにより、
共通理解が出てくる。そこから、「自然に子どもと大
人が集う保育所」が実現していくことだろう。

これからも、今まで積み重ねてきた貴重な実践を基
に、共に学んでいきたいと思う。